

第1部

さまざまに輝く・その仕掛け人たち～地域篇

「命の価値」の問い ～「それはホロコーストの‘リハーサル’だった －障害者虐待 70年目の真実－」から～

コーディネーター 熊田 佳代子さん（番組プロデューサー）

去年、私が所属するNHKの福祉班では、戦後70年の節目にさまざまな番組で福祉の戦後史をたどってきました。加えて夏には「障害者と戦争」をテーマに、日本やドイツで戦時中、知的・精神障害のある人たちの身に起きたことを特集、一連の制作を通じて、あまりのむごさに胸が苦しくなることもしばしばでした。

今年の「えにしの会」は、障害のある人もない人も様々に輝く地域の実践を聞くことのできる貴重な場と伺っています。そこで、あえて人々が背負ってきた負の歴史を考えることで、いかに日頃からの実践が重要なことかを深く感じられればと思ひ上記のうちハートネットTVやETV特集（Eテレ）で放送した「それはホロコーストの‘リハーサル’だった～障害者虐殺70年目の真実～」についてお伝えしたいと思います。

番組化のきっかけ

600万人ものユダヤ人犠牲者を出し「人類最大の悲劇」と言われてきたナチス・ドイツによるホロコースト。しかし、それより前からおよそ20万人ものドイツ人の精神障害者や知的障害者、回復の見込みがないとされた病人たちが「生きる価値がない」として、ガス室などで殺害されたことについては、これまであ

まり注目されてきませんでした。ドイツでは、最近ようやく事実に向き合う動きが始まっています。2010年、ドイツ精神医学精神療法神経学会が長年の沈黙を破り、過去に自分たち精神科医が患者を殺害してきたと認め、謝罪。その後専門家を入れた第三者委員会を設置し、いかに当時の医師たちが殺人に関わるように

いたホロコースト以前にガス室が作られていた精神科病院の地下通路



なったのかなどについて
去年の秋、報告書をまとめました。また、政府も障害者や患者たちの慰霊碑を建立し、遺族たちも少しずつ声をあげるようになっていきます。

私たちはこの悲惨な歴

史を「なんとなく知っている」程度で、本格的に取材をしたのは初めてでした。番組化のきっかけは、日本障害者協議会代表・藤井克徳さんのドイツ訪問。ナチス時代にユダヤ人障害者をかくまった、オットー・ヴァイトというドイツ人（自らも視覚障害）のことを日本にもっと広めたい、という藤井さんの思いを聞き、ドイツへ同行させて頂き、ヴァイトのこともともに障害者虐殺についても掘り下げることにしたのです。戦後70年の節目、「障害者虐殺は狂気の時代のなせる極端



障害者だった父親を殺された遺族とともに、お墓を訪れる藤井克徳さん（真ん中）

な事態」と片付けるのではなく、時空を超えて今私たちに問いかけられていることを藤井さんとともに考える貴重な機会となりました。

「T4作戦」はいかにして起きたか

そもそもなぜこんな悲劇が起きたのでしょうか？これまで明らかになったことを‘大雑把に’まとめるとこうなります。20世紀前半、医学の進歩で精神科にも治療法が開発され始め、当時の‘革新派’の医師たちは、そうした治療法を使って「改善の可能性がある患者を重点的に治療したい」と考えるようになります。ところが「治療効果のない入院患者」も多く、ベッドの空きからも、研究成果の点からも彼らが‘邪魔になる’というジレンマに直面していました。

ちょうどその頃、社会的には優生思想が広まり、ドイツでも遺伝学者や精神科医らが「遺伝的価値が低い人」を増やさないようコントロールする方法を模索していました。そうした中、精神科医と法律家による、一冊の過激な本も出版されます。「生きるに値しない命を終わらせる行為の解禁」（1920）です。障害者などを生かしてきたことは‘行き過ぎ’の行為で彼らの排除（殺害）は犯罪ではなく、社会や本人・家族にとっても有益なのだと結論づけました。こうして、医学の側に‘命の価値’を選別するような

流れが芽生えていたところ、かのヒトラーがそれを利用します。強いドイツ民族による強いドイツ帝国の復国を目指したヒトラーは、政権をとる前から「不健康で無価値な者は、その苦悩を自分の子どもの身体に伝えてはならない…国家は幾千年もの未来の保護者として考えねばならず、この未来に対しては、個人の希望や我欲などは無価値と考え、犠牲にしなければならない」（わが闘争（上）—民族主義的世界観（角川文庫））と表明。1933年政権につくと、「断種法」を制定し「遺伝的に価値がない者」は、遺伝子を引き継いではならないとして断種手術を受けることを義務づけました。これを医学や優生学の側も、自分たちの‘理想’を実現できるものとして受入れます。するとヒトラーはさらに、戦争に備え軍備を拡張する一方、社会保障費を削減するため「障害者は生きていだけで可哀想だけでなく、金のかかる“価値のない存在”」とあらゆる手で国民にすりこんでいきました。ついには第二次世界大戦が始まったその日付で「治癒できない患者を安楽死させる権限」を側



てんかんのため殺された、ヘルガ・オルトレップさん(右)

近・主治医に与え、精神障害者や知的障害者、回復の見込みのない患者たちの大量殺害に道を開いたのです。

この計画は本部が置かれた場所から別名「T4作戦」と呼ばれ、全国6カ所の施設で2年間に7万人が殺害

されました。作戦中止後も各地で、医師らが自発的に継続、終戦までに20万人が殺されたとみられています。後にT4作戦の大量殺害のノウハウはユダヤ人収容所にも引き継がれ、大規模なユダヤ人虐殺につながっていきました。

背景にあること

この歴史を長年研究してきた第三者調査委員会の代表で歴史学者のハンス・ワルター・シュムール氏は、優生思想に基づく断種と障害者たちを殺害する安楽死にはギャップがあるとしつつも、人間を「健康で社会に役立つ者」と、「劣っていて価値のない者」に二分する基本的な考えがあったことが、大量虐殺の土壌になったといいます。また、藤井克

徳さんは、そこに戦争という要素が大きく作用したことも指摘します。国家間が力を競うという非常事態が加わる中、自らの意思を表現しづらい当事者だけでなく、一般市民や家族でさえ感覚がマヒ。差別や排除が当たり前になり、そうした殺害がおかしいと思っても、自分がやり玉に挙げられることを恐れ声を上げられなくなっていったとみられています。

過去の話ではない

今回、藤井さんが対談した研究者や遺族、ドイツの障害当事者など様々な立場の人が口々に言っていたのは、これは単なる過去の話ではない、ということです。社会に役に立つかどうかという視点に基づいた「命の価値づけ」は今も起きているとシュ

ムール氏は警告します。「人間は、命の価値を尊重しなくなると人が殺せてしまうのです。社会の中に、病、障害、苦悩、死が存在することを受け入れる。こういった意見は今も少なすぎますし、声が小さすぎます。わたしたちは、命に関する問題



殺されたパーキンソン病治療の入院中に、ガス室に送られ

に直面したとき、他人の価値観にふりまわされていないか、自分で判断し、それがもたらす結果まで想像できているか、自問自答しなくてはなりません」と。また、冒頭のドイツ精神医学精神療法神経学会のシュナイダー元会長も、出生前診断や安楽死（尊厳死）など命をめぐる現在の問題を考える

とき、歴史から学ぶことは多いと話していました。さらに当事者の立場からは、ドイツの障害者運動のリーダーが「人は、生きる価値がないと言われ続けると、自分でもそう思うようになってしまう。障害を‘修理’してもらわなくても自分には生きる価値があると強く思うことが大事だ」と語っていました。

ドイツでは、歴史の反省にたち、小学生の頃からナチスの行いを学んだり障害のある子どももいない子どもも一緒にお互いを考える授業をしたりするなど、同じ過ちを繰り返さないような努力を続けています。また90年代に、障害者差別に配慮するという理由から、胎児条項（胎児に‘病气’や‘障害’がある場合に人工妊娠中絶をしてもよいということ）を廃止するなど、「命の価値」について国民全体で考える機会も多いようです。

日本では？ 私たちにできること

「命の価値」を巡る問いを番組にまとめていく中で、今の日本にもあてはまることが多いと、ふと背筋が寒くなるようなこともありました。自分には生きる価値がないと自ら命を絶つ若者たち、障害者に対するヘイトスピーチ、精神・知的障害のある人たちの多くが、施設や病院からなかなか出られないことなど…もし経済が悪化したり、非常事態が起きると、命の選別意識がむき出しにならないとも限りません。

では、どうしたら防げるのか？藤井さんは「どんなことにも前触れがあるので、心の目を開いて注意せよ」と言います。これは、制作者として肝に銘じるべき言葉です。そしてもうひとつ、普段から地

域などのコミュニティで、障害のある人もない人も顔を合わせ、共に生きる土壌作りがいかにか大切かをあらためて感じています。「知らない人」は「怖い人」になり、それが「悪い人」になったり「自分より劣った人」に変換される装置は、自分を含め、「普通の人」の中にも備わっていると、番組を通して突きつけられました。この‘気持ち悪さ’を忘れずに、私自身も歳を取っていく中、日頃から地域の一員としてさまざまな人を知り、楽しく関わっていきたいと思います。既に各地でさまざまな‘実践’が行われているので、「えにし」ではその‘仕掛け人’たちから話を聞けることを楽しみにしています。

